

闘球盤とカロム－『李氏朝鮮最後の王 李垠 [大正期]』補遺*

李 建 志**

0. はじめに

梨本宮方子女王の「日記」がある。大正8(1919)年の1月1日から12月31日までしか残されていないが、現在、韓国古宮博物館に所蔵されており、韓国古宮博物館編『河正雄寄贈展 純宗皇帝の西北巡幸と英親王・王妃の一生 (하정웅 기증진 순종황제 서북순행과 영친왕·왕비의 일생)』(2011)に収録されている。ここでは朝鮮最後の王となる李垠と結婚する方子女王の結婚前－本来は大正8年4月に結婚する予定が、李垠の父である高宗薨去によって1年延期となる－のゆるい気持ち、李垠を深く愛する気持ちが素直につづられている。詳しくは、拙著『李氏朝鮮最後の王 李垠 大日本帝国 [大正期]』(2022)を参照してもらいたいが、この「日記」に気になる記述がある。大正8年11月16日(日)に李垠が梨本宮邸を訪問し、1日楽しく過ごすという記述のなかに「午後2時15分過、巖 [柱益] 賛侍おともで [李垠が] 成らせられました。長い演習にやけ給ひしおかほいつにかはらす御機嫌よく、誠にうれしく思ひました。お居間で闘球盤をして遊ぶ。おやつ過は玉突をしました」とある。「玉突」はビリヤードのことで、この頃流行しはじめた屋内の運動であり、朝鮮でも純宗が毎日のように興じているし、大正天皇もビリヤードが趣味だったという。李垠の三島別邸「楽寿園」は現存するが、そこにも「撞球場」があるので、李垠もビリヤードを趣味としていたのは間違いない。

しかし、問題はそこではない。その直前にある「闘球盤」とは何か、ということだ。私は先に紹

介した本のなかで、註として「現在ではカロムあるいはキャロムと呼ばれる盤上ゲームで、おはじきとビリヤードを足したような遊び。南アジア発祥といわれる。現在、日本では彦根のご当地ゲームとなっている」(李、2022、551頁)と記した。しかし、これは正確さに欠ける説明であることに気づき、同書の補遺として、この「闘球盤」と「カロム」については説明が必要だろうと考えた。また、註に書いたカロムは彦根という京都と指呼の間にある地域の「ご当地ゲーム」であり、これについてもより深く考察する必要があると考える。これが本稿を書こうと決意した理由である。

よって以下に、まず「カロム」とはなんなのか、そして次に「闘球盤」とはなんのかを、論じていきたい。そして、それらは相互に関連性があるのかなど、話題として提供していきたいと考える。その上で、いまでも毎年12月にカロムの大会を開いている彦根カロムについて、今後調査をし、京都民俗学会で発表するための前段階の論考として、本稿を位置付けたいと願っている。

附記

引用文献は基本的に新漢字に改めた。しかし、旧かなづかいはできるだけ残した。また、本稿は科学研究費研究課題「大日本帝国と李垠－朝鮮最後の王から見た日韓の比較文化研究」(研究課題番号19K00538)の成果の一部である。

*キーワード：闘球盤、カロム、李方子

**関西学院大学社会学部教授

1. 「カロム」とは何か

古川ロッパの日記に、次のような記載がある。

[昭和一五（一九四〇）年] 九月十一日（水曜）

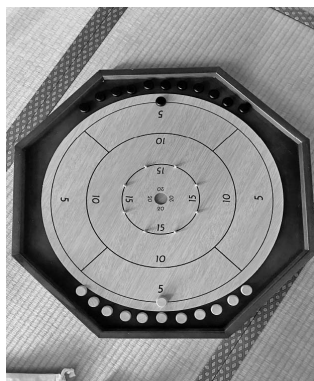
今日もよく寝た。十一時半に迎へが来り、眼科へ行き、日本橋の三越本店へ行く。闘球盤を買ふつもりが、小さいのしかないので、止めて、四階の新を呼んで食堂で冷コーヒー、伊東屋へ寄って、カルムを買って、本社へ行く。十月の大阪を決定の筈で文芸部が集まった、葦原邦子が母親の反対で出演出来なくなり、古賀政男のみ出演、さて、その出しもの今日は決定出来ず、平野・菊田・斎藤を連れて三直で天ぶら、飯が出ないから榮ずしへ寄って、すしをつまんで座へ。防空明けでワットと来ると思ってたが、七部強位の入りであらうか。何うにもしめって、カラヘツ笑はない客である。防空などでいちめ抜かれて活気を失ったのか。（古川、2007、739頁）

すでに戦争は長引きはじめ、活気が失われた東京で、奮闘する古川ロッパの日常が活写されている。菊田は菊田一夫のことであり、平野はおそらく平野みどりのことだろう。さて、この日の日記を引用したのはほかでもない。ロッパが関心を示している「闘球盤」と「カルム」に注目したいか

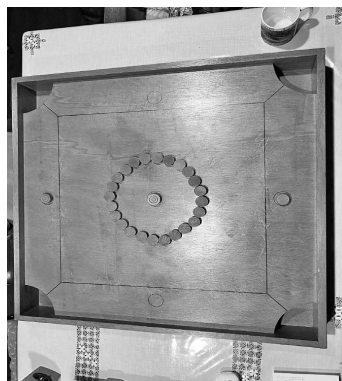
らだ。

すでに述べたように、李垠と方子女王は、結婚前からすでに恋人同士のように付きあっていた。そして、梨本宮邸に遊びに行った李垠と方子女王は、ビリヤードのほか「闘球盤」などに興じていた。この事実については、李建志（2022）の結章三節を参照して欲しいが、すでに述べたように私は、この本で「闘球盤」と「カロム」を同一のものとして注記してしまった。しかし、ロッパの日記で明らかなように、「闘球盤」と「カラム [カロム]」は別の遊具のようだ。伊東屋といえば、いまも銀座に残る文房具店の老舗だが、ここに「カロム」が売られていたというのは面白い。ちなみに、彦根青年会議所が街おこしとして取り組んだ「カロム」の源流をたどるプロジェクトをまとめた『カロムロード』（杉原正樹編、1997）によれば、「カロム」のことを「カラム」ともいうらしい（同書、15-16頁）。英語では「carrom」と表記され、「キャロム」ともいう。ロッパは「カラム」と呼んでいるが、これが「カロム」を指すのは疑いようがない。彼はこのとき、家でいわゆるボードゲームに興じようと思っていたが、三越本店に思ふような「闘球盤」がなかったため、「カロム」で妥協したということになるからだ。

では、この「闘球盤」と「カロム」は、どのような遊具なのだろうか。また、これらについて詳しく述べられた本などはないのだろうか。すでに、家庭で「闘球盤」や「カロム」をしている家はかなり珍しくなっているだろう。私自身、この李垠の研究ではじめて知った盤上ゲームだから



左 闘球盤（クロキノール・カナダ製）



右 カロム（彦根製）

だ。しかし、現在でも彦根市では「ご当地ゲーム」として競技者がそれなりにそろっており、毎年大会が開かれるほどだという。まだ完全に滅びたものではないのだ。ではまず、「闘球盤」と比べてまだ命脈を保っているといつていい「カロム」について論じてみよう。

現在までのところ、日本でこの「カロム」などのボードゲームについてまとめた論考は少ない。先に触れた杉原正樹編（1997）ぐらいだろうか。杉原氏は彦根市にある『ストリート・ジャーナル』編集部』の編集者だという（高橋、1989、223頁）。昭和の中期まで、このゲームはそれなりに遊ばれていたのに、昭和の後半には消えてなくなってしまったといつていいほどだ。いまは彦根以外では誰にも触れられない存在へと転落している。そこで、彦根市で販売しているカロムを購入し、夫婦で遊んでみた。ルールがわからないため、まずはYouTubeで「彦根に伝わる謎のゲーム『カロム』って何？」（2017）を視聴し、見よう見まねで、ほとんど毎晩のように1~2ゲーム遊ぶようになった。ルールは至って単純だ。まず、競技者はふたりあるいは4人。バックと呼ばれる赤と青の丸く平たい玉を盤の中央にある円型の線の上に乗せ、それを盤の四隅にあるポケットに落としあうというものだ。盤は75cm四方の正四角形。盤、バックなどの駒ともに木製だ。バックは赤、青それぞれ12個で、ストライカーと呼ばれる少し大きめの丸く平たい玉を指で弾いてポケットに落とす。私はつねに赤を選び、奥さん（神戸女子大学文学部の齋藤由紀）は必ず青を選ぶ。競技のとき、赤のストライカーの競技者は赤のバックを、青のストライカーの競技者は青のバックを落とすのだが、間違っただけで違うバックを落とした場合は「相手へのプレゼント」となってしまう。また、24個のバックの輪の真ん中にジャックと呼ばれる大玉があり、先に12バックを先取した者がこれを狙うことができる。最終的に、ジャックを落とした者あるいはペアが勝利ということになる。ストライカーを人差し指や親指で弾く

度に、「おはじきみたいだな」と思うし、バックをポケットに落とすとき、「ビリヤードみたいだな」と感じる。まさに、「おはじきとビリヤードを足したような遊び」というのは間違っていない。

話を元に戻そう。盤上にはポケットからそれぞれ短い「線」が引かれており、盤の内側に大きく四角い「線」が引かれている。ストライカーは最初、四辺の中央にある「丸」から弾かれるが、2度目以降はこの黒い「線」「枠」の上から弾くことになる。どこから弾くかは競技者の任意だが、黒い「線」「枠」の上からでなければならないというのがルールで、もしも誤ってストライカーがポケットに落ちた場合、かりにバックを落としていても、バックを元の場所に戻さなければならない。得点にはならない。

いま、バック、ストライカー、ジャックなどということばを使ってきたが、昔はどうだったのだろうか。のちに見るように、これは北米からもたらされたゲームであり、だとすれば英単語で表現されるのも無理はない。しかし、敗戦前の日本で、このようなことばはなじみが薄かったと思われる。「カロムの玉は今でこそバックやストライカーとしゃれた名前では呼ばれているけど、以前は、バックはただの『玉』、ストライカーは『親玉』あるいは『手玉』、ジャックは『王さん』とか、なぜか『王将』などと日本語で呼ばれていた」（杉原、1997、49頁）という。

さて、このゲームがいつ頃、どこから日本へと持ち込まれたのかは諸説がある。しかし、彦根青年会議所の調べによると、ウィリアム・メレル・ヴォーリズなど宣教師が持ち込んだという説と、カナダ移民の持ち帰りだったという説があるようだ。まずヴォーリズだが、彼は「明治三八年（一九〇五）二月二日、海を渡り初めて近江八幡の地を踏んだ」。当時彼は25歳で、YMCAの組織化や教育活動を行っていたという（同書、33頁）。「近江八幡市内には、彼が晩年を過ごした『一柳会館』という建物が当時そのままの姿をとどめている。現在は記念館として多くの資料が保存され

- 1) ビリヤードも競技者の体格差が勝負にそれほど影響するとは思えないが、やはり手の長さや背筋の力、身長差などは勝負の際には無視出来ないだろう。しかし、カロムの場合、ほとんど体格差は影響しない。実際、私は奥さんとカロムをしても二度しか勝ったことがなく、あとは全敗である。

ている。昭和16年(1941)1月、彼は日本人の妻である妻の姓をとり、日本国籍を得て、一柳米来留と名のつた。『米国より来たりて留まる』、その年の12月太平洋戦争が始まることを思えば、近江にかけた決意を想わざるをえない(同書、34頁)。ヴォーリズは建築家としても有名で、近江兄弟社高校や関西学院大学など、すぐれた建築物を遺したことで知られている。

このヴォーリズを直接知る福井清一氏が次のように語っている。「ヴォーリズさんはたくさんの方と自宅で過ごされました。YMCAの活動を通してアメリカのゲームをして遊ばれたのは本当です。[中略]私もヴォーリズさんがカラムをしておられたところに居合わせたことがあります(同前)。ヴォーリズがカラムを日本に持ち込んだ宣教師のひとりであることは間違いない事実だ。「カラム渡来。明治という時代、YMCAの海外宣教活動とともに日本にさまざまな遊びやゲームが伝えられたことが記録されている。カラムもまたそうした盤上ゲームの1つだった。おそらく、これが滋賀県におけるカラム史の始まりといえるだろう」(同書、35頁)。明治末年にカラムはキリスト教布教という意味を持ちつつ、滋賀県に根付いたといえそうだ。

しかし、もうひとつ無視出来ない仮説がある。それが「カナダ移民説」だ。現在、日本でカラムをつくっている木工所は彦根市にある中野木工所しかないのだが、ここは大正9(1920)年に故中野十太郎氏が創業したという。カラムは主力商品ではなく「暇な時、遊んでいるのももったいないからと作っていただけ」だったようだ(同書、42頁)。それでも、「昭和二〇年後半から三〇年前半」に「年間に五〇〇~八〇〇台は確実に売れていました」(同書、42-43頁)と、その子息である重彦氏は語っている。そして重彦氏は、なにゆえに彦根でカラムが作られていたかに関しては、「十太郎は彦根の八坂(旧・磯田村。同村は現在の彦根市八坂・須越・三津屋の地域。1937年、彦根市に編入)の出なんです。八坂はカナダ移民の多いところでして、カナダの土産として誰かが持って帰ってきたのではないのでしょうか」(同書、43頁)と推察している。八坂一帯は、明治18

(1885)年と明治29(1896)年の二度にわたって大水害に見舞われ、多くの者が海外へと渡っていったという(同書、44頁)。例えば、「昭和六年(一九三一)の当時、磯田村は本籍人口の四四パーセントが海外に旅立ち、その半数がカナダであったという。年代的にカラムが彦根に現れる頃ときれいに重なる」(同書、45頁)。八坂出身の中野十太郎氏が、片手間とはいえカラムを作っていたというのは、八坂という場所なканずく磯田村の人びとがカラムを持ち込んでいたからにはほかならない。ここに、宣教師によって広められた盤上ゲームが、別のルートで彦根に持ち込まれ、中野木工所で製作されるに至る道筋が見えてくる。

いままで引用してきた『カラムロード』のなかには、人類学者である棚瀬慈郎氏のことばが採録されている。棚瀬氏はこういう。

旅をしていますと、インド、ネパール、チベットといった国々でカラムを見かけます。一番よく見るのは、ネパールへ行くと街角にカラムコーナー、日本でいう喫茶店、つまりお茶を飲む店でもあるんですが、そこで盤を借り出すんです。彦根で使っているものより大型で、コーナーも小さい。チップというか弾くおはじきみたいなものはプラスチック製で跳ね返りがいいんです。

こう言っははなんですが、彦根のカラムは子供の遊びみたいで、適当に打てば全部入ってしまうんですけど、向こうのは非常に難しく、要するに日本におけるビリヤードみたいなもので、大人たちがお金をかけてやっています。テクニックを競う大人の遊びとして向こうでは定着しています。

ネパール、インド、聞くとところによるとスリランカにも、ミャンマーにもあるということですが、要するに昔イギリスの植民地だったところですよ。英語の辞書にも『キャロム』とありますから、イギリス系の遊びであることは間違いないです。[中略]ゲームはイギリス系だけれど、持ち込んだのはアメリカ人ではないか、イギリスからアメリカを経由して彦根に来て、彦根、近江八幡といった湖東の地域を中心に残ったのではないかとこのよ

うな結論がでたわけです。(同書、31-32頁)

なるほど、英国でカロムは成立し、北米に渡り、彦根のカナダ移民やヴォーリズといった人びとによって湖東に定着したわけだ²⁾。しかし、英国に渡る「前」もあると考えざるをえない部分がある。それは、似たような「盤上ゲーム」がエジプトで発祥していることや、中国でも見られることなどを考えると当然かも知れない。

一二世紀から一三世紀にかけて、エジプト・イエメンに「カエラム」という名のカロムの原形が生まれ、一五世紀イギリスに伝えられる。そしてイギリスでビリヤードとカロムという二つのゲームに改良され世界に広まった。さらに、海を渡りアメリカ大陸へも伝播。アジアの地域では、インド「インディアンズヌーカー」、ミャンマー・ビルマ「ブルーミスカロム」、マレーシア・インドでは「カランボーラ」、ネパール「カランボール」という名前で現在も実際に遊ばれているという。中国ではビリヤードのようにキューを使ってゲームをする。(同書、14-15頁)

これは彦根青年会議所の仮説だが、なかなか説得力がある³⁾。とくに、英国でこのゲームがビリヤードとカロムに分岐しているというのも面白い。中国のものは「康楽球(カーロンチュウ)」として紹介されており、たしかにキューのようなものでおはじきの玉のようなものを打ち、四隅のポケットに入れる。名前も「カロム」と関連がありそうだが、内容的にはビリヤードとカロムの折衷とでもいうべきものだ。「もともと中国にあったものではなく、ヨーロッパからきたものらしい。一九五〇～六〇年代にかけて流行していた。公園の入口に『貸し康楽球』があり、代金はゲームに負けた人が支払う。博打的な遊び方もする」(同書、82頁)という。第二次世界大戦前に香港あるいは上海の英米共同租界から入ったのだろうか。それとも中華人民共和国成立(1949年)以後に入って来たのか、よくはわからないが、すでに見た棚瀬氏の議論を援用すると、やはり1930年代以前に香港や上海(英国植民地や租界)から入り、日本との泥沼の戦争や国共内戦を経て、落ち着いた頃に広まったとみるのが妥当ではないかと思料する。

-
- 2) 民俗学的な興味でいうと、もうひとつ面白い事例が『カロムロード』では紹介されている。それは彦根市八坂に残る「連中」という組織のことだ。「昭和三〇年頃まで、八坂町には『連中(れんじゅう)』という組織があった。単に『若い衆』とも呼ばれたりする。数え年で一五歳になる少年たちが毎年新しい連中となる。『連中に入るといのは、昔の元服式みたいなものやな』という言葉が示すとおり、以後、集落の神事などに一員として参加が定められる。「連中」には実家を離れて過ごす「宿」となる家があったという。「戦後、この連中という組織は面倒だし、しんどいのでという理由でやめようかということになりました」。しかし、この「連中」をきちんと記憶している辻勘次氏(彦根市八坂出身)は「連中の宿には必ずカルム盤(辻さんは『カロム』ではなく『カルム』と発音する)が置いてあった」といい、「囲碁や将棋の盤もあったんですが、カルムはルールを知らなくてもしばらく見ていればなんとなくどうすればいいのかわかってくれる」ため、カロムを楽しむ「連中」が多かったという。そして、『辻勘五郎連中』というのがあった。辻[勘次]さんの父[勘五郎]が宿親[連中をまとめる宿の長]を務めていたわけだ。昭和三[一九二八]年に連中になった疋田隆造さんという少年がいた。逆算すれば大正三[一九一四]年生まれ、辻[勘次]さんより七つ年上である。指物を生業としていたその少年[疋田隆造]の父から、『息子が若い衆に加わるのを記念してぜひ、カロム盤を作らせて欲しい』……そんな申し出が宿親に入る。指物師は子供が若衆となったのを慶び腕を振るい、二つとない美しい盤が贈られた。一五歳未満の子供だった辻[勘次]さんは、めったに触れることができなかったという(以上、杉原、1997、46-48頁)。それほど、「連中」の「宿」にとってカロムは大切なゲームであり、しかも年長にならないと見ることができないほど「上位」の盤があったということだ。この「連中」は日本全国にある「若衆宿」によく似ている。しかし、名称だけでなく機能が若干異なるように思える。そしてその「宿」に、カロムがあったのは象徴的だ。辻氏が彦根のなかでも八坂出身、すなわちカロムを日本に取り入れた可能性の高いカナダ移民と近い位置の間であることも注目していただろう。疋田隆造氏の父、すなわち指物師が作ったカロム盤はいまでも保存され、『カロムロード』が書かれた当時である平成10(1997)年には、辻勘次氏が大切に保存していたという。
- 3) より詳しくは、『カロムロード』に収録されている南真木人氏の「盤上ゲームとしてのキャロム」を参照して欲しい。とくに南氏は、ネパールのカロム事情についてかなり詳細に述べている。

2. 「闘球盤」と「クロックノール」 —それは「カロム」とは違うのか

平成26(2014)年に公開された『昭和天皇実録』には、裕仁親王が幼少期に「クロックノール」に興じるという記載が何度も登場する。初出は明治40(1907)年9月11日で、「午後、芳麿王参殿につき、御一緒に旗あわせ、クロックノール、砂場遊びなどをされる」とある。芳麿王とは、山階宮家の第二王子で、戦前に臣籍降下して山階芳麿となり、鳥類学の研究者となった人物だ。明治33(1900)年7月生まれだから、裕仁親王よりちょうど1歳年上ということになる。この記載の頃には、裕仁親王は満6歳、芳麿王は満7歳ということだ。「砂場遊び」などでもわかるとおり、まさに子どもの遊具として、「クロックノール」は存在していたことがわかる。『昭和天皇実録』を追うと、明治四一(一九〇八)年八月二日に「恒久王参邸につき、クロックノールなどにてお遊びになる」、明治四三(一九一〇)年一月一七日に「午後は〔沼津〕御用邸内においてジャーマン・ビリヤード、人取り、玉鬼、相撲、クロックノールなど種々のお遊び」とある。恒久王とは竹田宮恒久王のことで、明治15(1882)年9月生まれというから、裕仁親王よりかなり年長だ。彼は大正8年にスペイン風邪で薨去するがそれは措くとしよう。実は、明治43年を最後に、「クロックノール」という「遊び」についての記載はぶつりとなくなってしまうのだ。すなわち、『昭和天皇実録』を見る限り、「クロックノール」とは「子どもの遊び」のようにも見える。

さて、この「クロックノール」について考察した論文がある。三橋正幸氏の「盤上遊戯『クロキノール(闘球盤)』の伝来と普及の一端」(2015)がそれだ。三橋氏はこういう。『昭和天皇実録』に「昭和天皇が幼少期にクロックノールでお遊びになられたという記録が複数あり、クロックノールとはどのような遊戯なのか、謎の遊びとして、その存在が注目された」が、「カナダで発祥したとされるクロキノール(Crokinole)のことであり、謎の遊び論叢はすぐに終結をみせた」。このクロキノールこそが和名で「闘球盤」となる。

しかし、「明治後期に流行した盤上遊戯『クロキノール』が国内にいつ頃持ち込まれ、どのように普及していったのかについては、不明な点が多い」(以上、同書、58頁)と議論を進め、「クロキノール」の伝来と販売経路、そして「闘球盤」との関係について論じている。

三橋氏の議論によれば、日本に「クロキノール」が伝来したのは明治34(1901)年だという。「クロキノールは一八七六年(明治九年)にカナダ・オンタリオの職人エックハート・ヴェットローファーによって作られた」(同書、58頁)とある。また、カナダだ。これが日本で売り出されたというが、どのような展開をしたのだろうか。実は明治36(1903)年に発売された『クロック術』(花王居主人編著)という本がある。三橋氏の研究によれば、この本は「国会図書館と長野県図書館にのみ所蔵が確認されている」(同書、61頁)というほど、稀少なものだ。闘球盤の遊び方を指南する小冊子で、33頁ほどの短いものだ。しかし、この本からさまざまなことがわかる。まずその「序文」は矢沢峯四郎という人物によって書かれているが「近来我松本地方に於て、盛に行はるゝ室内遊戯にして、最も余の意を得たるもの二あり。一つはピンポンなり、一つはクロックノールなり」とあり、裕仁親王が遊ぶだいたい前から高美書店の所在地である松本市でクロックノール(闘球盤)が流行していることがわかる。また「はしがき」には「クロックは数年前松本在留の英国人マギニス氏が、本国より初めて取寄せられたのを、衣斐氏が雛形として製作せしめられたのが濫觴で、それから同人間に行はれ従て之が製作に従事するものも出来、今日では非常の速度を以て流行しつゝある。畢竟此技術はビリヤードほどハイカラ的ではなく且つ費用も懸らぬ上最も平民的で手軽で誰でも行ふことが出来るのである」と、日本に最初にこれを導入したのは英国人のマギニスであったことと、それを長野県松本市(現・松本市)の事業者が製作しはじめたこと、そしてビリヤードと比較して手軽である上「平民的」だということがはっきりと書かれている⁴⁾。この「平民的」な遊びを、この本が出た4年後に最も「高貴な」ひとが興じているのも面白い。

では、クロックノールはどこで売られていたの

だろう。『クロック術』の末尾にある公告によると、「諸官衙学校用器具製造販売 製造人 秋山熊吉／大売捌所 慶林堂 高美書店」とある。ともに長野県松本町にあり、いわばクロックノールといえば松本という状況であったことがわかる。金額は「一具金弍円五拾銭より金参円迄／球入器二箇付金参円二拾五銭迄／各種有之申候」と、どうも一種類ではないらしいこともわかる。私の書いた『李氏朝鮮最後の王 李垺』では、各時代の物価を対比しながら、その当時の1円がいまの金銭感覚でいくぐらいかということを随所で述べている。例えば、明治33（1900）年頃の1円はだいたい現在の金銭感覚で1万円、明治末／大正初（1912）年頃の1円はだいたい7000円ぐらいだと推定している。だとしたら、このクロックノールは、いちばん安いものでも2万円以上したといえまいか。かなり高価な遊具だ。

これとは別に「東京日本橋馬喰町の大一商店は、商品名を闘球盤として販売を行っていた」。北沢佐蔵の名義で「闘球盤は明治三七〔一九〇四〕年六月八日付けで意匠登録第一九四六号を取得している」（三橋、2015、59頁）という。「クロック盤」も翌明治38〔1905〕年12月11日に実用新案に登録しているから、おそらく東京でクロック盤を手に入れた大一商店（滝沢稲恵社長）が、東京の業者に盤を作らせて、名前をよりわかりやすく親しみやすい名称である「闘球盤」として意匠登録されてしまったため、困った松本の秋山熊吉らが対抗措置として「クロック盤」を実用新案登録したのだろう。裕仁親王が遊んだのはどちらだろうか。『昭和天皇実録』にはっきりと「クロックノール」と書いてあるのだから、おそらく松本の高美書店から「クロック盤」を取り寄せたのではないかと思料する。宮内省としては、田舎の会社が作っていた＝意匠登録をしていなかったことを奇貨として、勝手に意匠登録した大一商店よりは、「本物」あるいは「元祖」の「クロックノール」を選択したということだろう。

先に、「子どもの遊び」と称したクロックノー

ル（闘球盤）だが、昭和に入ってはロッパのようないい大人が遊んでいた。いや、最初からクロックノールはピンポンと対照されていたのだから、もともと「子どもの遊び」と限定できるものではない。では、どのような遊びなのか、『カロムロード』に寄稿している南真木人氏に語ってもらおう。

盤は、四つ角に穴がない代わりに、中央に六～八本の釘が打たれた円型の段がある。玉は、白黒各一〇個で、段（陸）から相手の玉を段の下（海）に落とすと同時に、自分の玉を中央の窪みに入れることを競う。陸には三重の同心円が描かれており、内側に近づくほど高得点になる。（杉原、1997、147頁）

そして南氏は、「カロムと闘球盤は、玉をはじく点ではとてもよく似ているが、その起源とするゲームやスポーツには大きな違いがありそうである」（同書、150頁）と述べる。南氏の見解ではカロムの語源として「一八世紀フランスで始められたキャロム・ビリヤード（フレンチ・ビリヤード）」に注目する。「それまで二個の球で遊ばれていたビリヤードに、赤球一個を加えたゲーム法」が考案されたのだが、「赤球のことをフランスの古語で *caram bole* と言い、これがキャロムの語源と考えられる」（同書、140頁）。そして、ゲームとしてはビリヤードからの派生だという。

ビリヤードの発展史を見てみると、イギリスにおいては、すでに一七世紀の前半にはテーブルにハザード（*hazards*）と呼ばれる穴がつけられていた。ハザードとは、本来イギリスのリアルテニスにおいて、コート側の側壁にいくつもつけられた観客席の特定の窓のことを指し、そこへボールを打ち込むと得点になったものである。（同書、141頁）

このテニスのハザードが、ビリヤードに応用された。ビリヤードの台にハザードが生まれ、そこ

4) この『クロック術』の「序文」と「はしがき」は頁数がふられておらず、それぞれ3頁程度書かれている。これらを合わせると、本書の内容は39頁ということになる。

に球を落とすという遊び方が生まれたわけだ。そして、それがカロムへと転化していくと、南氏は主張している。それに対して「闘球盤の方は、明らかにその祖形と思われる屋外ゲームがあるのでは」と強調。「それは、マープル (marbles) という、イギリスで遊ばれている円型の段上で球を用いるビー玉遊びである」と断言する。そして「カロムと闘球盤の起源は、どうやら別のものと考えられ、混同しない方が良くであろう。また、この二つのゲームはイギリスにおいて発展したことが推測できる」(以上、同書、150-151頁)という。

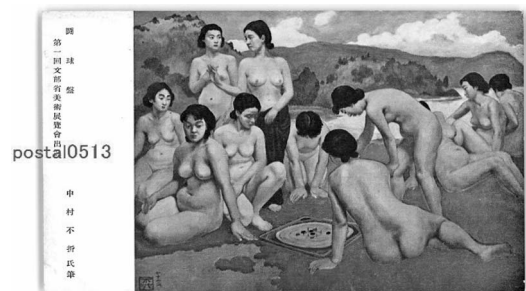
たしかに、玉を指で弾くという類似性はあるものの、ビリヤードに似た遊び方をするカロムと、敵の玉を陸から海へと落としたり、中央の窪みを取りあつたりする闘球盤は、むしろ異質なものだといえよう。だとすれば、私が『李氏朝鮮最後の王 李垠 大日本帝国 [大正期]』で書いた、闘球盤に関する註記は間違っていたことになる。ここに訂正しておこう。正しくは、おそらく大一商店が販売していたであろう闘球盤が、ビリヤードとともに梨本宮家の娯楽室にあった。ビリヤードと違い、玉を指で弾くという体格差あるいは体力差といったものがゲームの勝敗に影響しにくいものであり、守正王をのぞくと女子しかいない「女の家」である梨本宮家(伊都子妃、方子女王、規子女王)では、必要なものだと考えられ、あえて購入して遊んでいたであろうということがわかる。

3. 「闘球盤」を描いた小説 —「むすび」にかえて

『カロムロード』には、次のような記述がある。「『空海』という北大路欣也主演の映画の中で一瞬だがチベット僧がカロムをしている場面があつたり、『地球の歩き方』という海外旅行のガイドブックにもチベットのカロムが写真入りで紹介されている」(杉原、1997、40頁)。また、作家の高橋義男氏にも「カロムの伝道師にと彦根を訪れる

著名人にカロム盤がプレゼントされた」といい、「虎姫様とカロムで遊ぶ」というエッセイをものしている(同書、29頁)。このエッセイは『田舎遊びムラ遊び』に収録されており、1989年に雑誌『BOX』3月号に掲載されたのが初出だ。高橋氏によると、「彦根市青年会議所は全国城下町シンポジウム」に参加しており、加盟城下町が持ちまわりで開催しているのだが、1989年に彦根市がこれを開催するにあたり「第1回カロム日本選手権がおこなわれた」(高橋、1989、221-222頁)という。意外にも、カロムはあちらこちらで触れる機会があるようだ。その意味では、たしかにカロムはかろうじて生き残っているといえそうだ⁵⁾。

では、闘球盤の方はどうなのだろうか。先に触れたように、『昭和天皇実録』や方子女王の日記、『古川ロッパ昭和日記』に載っているのだが、このような日記類だけではなく、昭和14(1939)年の第一回文部省美術展覧会(文展)に中村不折が「闘球盤」という絵を出品している。



上の絵では、裸婦たちの真ん中に円い盤が見えるが、これが「闘球盤」だ。そのほか、小説にもたびたび登場している。まず、大正10(1923)年にユーモア作家の元祖といつていい佐々木邦が書いた『続珍太郎日記』にも闘球盤が登場する。第6回と題された章で、「小学時代に乃公の同級生の何誰かの家で赤ん坊の生れなかつた月は殆どなかつた」と主人公の珍太郎は述懐し、「長男だけれど末つ子で弟も妹もない乃公は然麼事を聞く^{うらや}と羨ましくてしかたがなかつた」が、同じように

5) 曾我麻佐子氏は Leap Motion というデバイスを使って、コンピュータ上でカロムのゲームを行うという発表をしている(曾我、2019)。そのような方法が拡がれば、もしかしたらオンライン上でもカロムが復活するかも知れない。

弟も妹もない「洪ちやん」は「尋常三年から四年へ上る時屹度一番になるから是非弟を生むで下さいとお母さんに頼むだくらる」だが、「金の勘定ではあるまいし月末までに必ず生でくれと言ふのは洪ちやんも少し無理だつた」。そこで「洪ちやんは弟の代りに闘球盤を買って貰つた」という（以上、佐々木、1922、190頁）。闘球盤を買ってもらおうというからには、子どもが遊ぶおもちゃとして闘球盤（おそらく古川ロッパのいう「小さいの」だろう）が定着していたことがわかる。それにしても、赤ん坊の代わりにおもちゃとは、いかにも子どもらしい挿話ではないか。

子どもらしいといったが、では闘球盤は童話に登場したりはしていないだろうか。塚原健二郎が昭和9（1934）年に書いた「うりもの屋ごっこ」⁶⁾には、次のような記述がある。「ある日曜日の朝、公園の銀杏の木の下で、三ちゃん、浩ちゃんと、正ちゃんが、うりもの屋ごっこをはじめました」。三ちゃんは八百屋、浩ちゃんは食堂をはじめが、正ちゃんは「何が、かなアとしばらく考へてゐましたが、ポンと手をうつて、『ほく、コリントゲームをやらう』といつてお家へとび帰りましたが、まもなく持つてきたのはおもちゃの闘球盤です」（塚原、1937、196頁）。ここにある「コリントゲーム」とは、「（コリント商會が用具を発売したからという）傾斜した逆U字型の盤に多くの釘を植え、所々に穴をあけて、小球を小棒で突いて盤上を走らせ、穴に入った結果で得点を競う遊戯」（広辞苑第4版）のことである」（半、2005、53頁）。台を斜めにして「球」を打たなければならないが、闘球盤などを斜めに立てかけて「玉」を打つても、とうていスマートボールのようにはいくまい。おそらく、流行しはじめた新しいゲームである「コリントゲーム」をどうやったら手持ちのもので再現できるか考へては、闘球盤を利用しようと思ひいたる。のちに見るように闘球盤には釘が8つあり、真ん中に穴があいているのだが、この釘と穴に目をつけ、コリントゲーム（スマートボール）に見立てたのだろう。いかにも子どもらしい発想だ。話自体は、中学生

の「茂チヤン」が、銀行家となって貨幣を発行し、みんなの店のものを買ひ占める。そして、役所をつくつて税金を徴収するのだが、税金をとるとき、「六年生の読本にかいてあるでせう」（塚原、1937、201頁）とあるように、相手は明らかに尋常小学校の子どもたちだ。当時は尋常小学校の上に高等小学校もあったから、茂チヤンは最低でも3つは年上、いまでいったら小学6年生の遊びに中学3年が邪魔に入るようなものだ。年甲斐もなく小学生たちの遊びを邪魔するので、みんなが一計を案じて「チリンチリン鈴をならしていつもくるるばのパンやさん」（同書、204頁）にみんなで群がり、茂チヤンが買う前に買ひ占めてしまふというオチだ。話としては決して面白くはないが、ここに闘球盤とともに、いまだに日本で残っているコリントゲーム（スマートボール）が登場するのは興味深い。

このように、闘球盤の表象は、カロムに負けず劣らずといった感がある。しかし、日本選手権が毎年彦根で開かれているカロムと違い、闘球盤は競技としては生き残っていない。これはとても残念なことだ。そこで、私はこの闘球盤（カナダ製クロキノール）を手に入れて、やはり齋藤由紀とふたりでゲームしてみた。闘球盤もカロムと同様に、ふたりか4人で遊ぶ。一辺が75cmぐらいだろう。盤上には同心円状の輪が描かれており、真ん中に穴があいている。その穴を中心に半径10cmほど輪があり、ここには「15」と書かれている。この「15」の輪には、8本の釘が打たれており、玉（ストライカー）が中に入りにくくなっている。「15」の輪より10cmほど離れたところに「10」の輪、そこよりもさらに10cmほど離れた場所に「5」の輪がある。両競技者はそれぞれ黒か白の玉を12個ずつ持つており、それぞれの陣地の「5」の輪の線上から順番に打つ。この競技者の数や玉を指で弾くという点はカロムにそっくりだ。ゲームは先攻者がまず「穴」を狙ひ、もしも穴に入れば「20」点獲得する。穴に玉が入った場合、その玉は競技者が確保し、次の競技者

6) この小説は『新童話選集・6 七階の子供たち』に収録されているが、「うりものやごっこ」の末尾に「〈一九三四年作〉」（塚原、1937、205頁）とあるので、昭和9年作であるといえよう。

が穴を狙うことが可能となる。もしも穴に入らなければ、後攻者が先攻者の打った球を狙って打たなければならない。そして、「5」の輪より外(海)に落としてしまえば、落とされた玉は0点となる。いったん、相互に12個の玉を打ちきった段階で点数を数え、より点数が高かった競技者が勝ちとなる。ある競技者が例えば100点だったとしよう。そして、相手方の点数が75点だとしたら、勝者は100点をとった側が差し引きで「25点」を確保する。何ゲームかをして、どちらかが100点を越えたところでゲーム終了となる。ここでも、私はいつも白を選び、齋藤由紀はいつも黒を選ぶ。そして、いつも齋藤由紀が勝利する。「釘」がある分、非常に玉の打ち方が難しく、その分、カロムより複雑だ。

この闘球盤について、世に知らしめる方法はないだろうか。第一、遊び方が知られていないのだから、再び競技人口が増えるとは思えない。でも、この闘球盤での勝負をそのまま小説化したものもある。それが、吉野臥城の「闘球盤」と、中勘助の「闘球盤」だ。これらを読むと、闘球盤はどういう遊びなのか、だいたい理解できるのだ。吉野の小説は彼自身と蒲原有明、岩野泡鳴が実名で登場する。「談話が途切れた」あと、岩野泡鳴が「弾かうぢやないか」(吉野、1921、351頁)といったことから、3人で闘球盤を囲む。「盤は方形で、ちよつと小さな飯台位^{ちやぶだい}ある。方形の盤面に内圏、中圏、外圏の三個の圏^{くわく}を画す。盤の中央に凹^{あな}穴がある。内圏の境に幾本の銀柱が建つて居る。これが鉄条網と称するのださうな」(同書、352頁)と、闘球盤の説明がまず入っている。それだけ、吉野は闘球盤をよく知らなかったのだろう。いや、この吉野という著者が素人として競技に入っていることで、闘球盤についての細かい説明が付されているわけだ。吉野は素人だからか、泡鳴と有明がまず勝負し、その後3人総当たりでゲームする。「勝星は有明君は第一、泡鳴君は第二、予は第三であつた。一碁は予と泡鳴君とは伯仲である。有明君は行^やらな^い。／玉突なら負けないと、泡鳴君は云つて居た」(同書、363

頁)と、闘球盤初心者の吉野は当然のように負けているものの、囲碁なら泡鳴に負けな^いとい^い、泡鳴は言い出しつべなの^に有明に負け^たからか、ビリヤードなら勝てると負け惜しみをいっている。囲碁やビリヤードが現在でも残っているのに、闘球盤だけが消えているのも面白い。

一方、中勘助の「闘球盤」だが、これは疎開先の静岡から東京に戻る直前の昭和22(1947)年頃の話だ。勘助の「銀の匙」を読んだ近所の少年(俊一)が、勘助になつている。そして「中さん今夜遊びにいらつしやらない? 闘球盤するから」(中、1948、137頁)と誘う。勘助は「勝たないやうに、負けすぎて興味をそがないやうにと加減して」勝負するが、「負けよう負けようとすれば、意地悪く点がすれすれになつて相手はますます熱中してくる」。「私は那須の与一を逆に 弓矢八幡この一発をはづさせたまへ」と一所懸命見当をちがへてパチリと弾いた。タッ! 球は柱にあたつてはねかへりからりと穴にはひつた。扇的だ」(同書、139-140頁)と、逆に勝ってしまうというなんともどかな話だ。闘球盤は小説のネタになるほど、子どもにも大人にも親しまれていたことになる。このようなかたちでカロムが小説化されることはなかったが、闘球盤は明らかにより広く「平民的」に遊ばれていたのだ。

しかし、この中勘助の小説以降には、闘球盤はまったくといっていいほど登場しなくなっていくのである。いや、昭和30(1955)年頃に火野葦平が闘球盤に触れているのだが、それは日本国内での話ではない。昭和30(1955)年に発表された『赤い国の旅人』というルポルタージュ風小説は、共産党によって指導される中華人民共和国を旅した「日記」の体裁をとっている。彼は4月24日に漢口を訪れ、「棧橋から上陸。ハイヤーとバスで宿舎へ。勝利街の四辻にある『江漢飯店』、ここに二泊後、北京へ向かう予定」だった。このホテルで「食堂に行く廊下の左側に弾子室(玉つき)、右側に、奕棋室と閲覧室。前者には将棋と闘球盤とが四、五台、マージャンはない」(火野、1956、141頁)とあるからだ⁷⁾。

このようにして闘球盤は表象としても影をひそ

7) 増田周子氏は、火野葦平の『赤い国の旅人』を、そのもととなっている「中国旅日記」との比較から深く分析

め、逆にカロムは命脈を保つ。非常に不思議な現象だ。すでに見たように、古川ロッパが闘球盤を買おうとしたところ思ったようなものがなく、仕方なくカロムにしたことは彼の日記で明らかになっている。これは単なる偶然ではあるが、ここに象徴的に見てとれるように、敗戦後の日本で、闘球盤はカロムに「弾き出された」のかも知れない。中勘助が闘球盤のゲームを小説にした時代は、まだ中野木工所で年間500~800台、すなわち1日2台ほどカロムを作って売っていた。しかし、そのカロムも気がつけば彦根のご当地ゲームへと小さくまとまってしまう。これから先、闘球盤やカロムが復活する可能性はあるのか、私には判断がつかない。75 cm 画の盤を置く場所がない家も都会には多いだろうし、第一誰もそのゲームを知らないのだから。闘球盤はいざ知らず、カロムの復活は、彦根青年会議所などの活躍にかかっている。競技人口が増えることを祈るばかりだ。

参考文献一覧

- 花王居主人編、1903、『クロック術』、高美書店。
- 宮内庁編、2014、CDRom『昭和天皇実録』、宮内庁。
- 佐々木邦、1921、『続珍太郎日記』、弘学館書店。
- 杉原正樹編、1997、『カロムロード』、サンライズ印刷出版部。
- 曾我麻佐子、2019、「Leap Motion を用いたカロムの遊び支援システム」、『インタラクティブ2019 論文集』、情報処理学会。
- 高橋義男、1989、『田舎遊びムラ遊び』、徳間文庫。
- 塚原健二郎、1937、「うりもの屋ごっこ」、『新童話選集・6 七階の子供たち』、子供研究社。
- 中勘助、1948、『闘球盤』、『鳥の物語』所収、山根書店。
- 半直哉、2005、「『美術による教育』に関する一考察：工作科『コリントゲームをつくろう』の実践事例を通して」、『山陽学園短期大学紀要』第36号、学校法人山陽学園山陽学園短期大学。
- 中村不折、1939、『闘球盤』、絵はがき。
- 火野葦平、1956、『赤い国の旅人』（第二刷）、朝日新聞社。初刷りは1955年。
- 古川ロッパ（滝大作監修）、2007、『古川ロッパ昭和日記〔新装版〕戦前編』、晶文社。
- 増田周子、2010、「火野葦平『中国旅日記』（1955年4月）翻刻」、『東アジア文化交渉研究』第3号、関西大学文化交渉学教育研究拠点。
- 、2011、「火野葦平『赤い国の旅人』の成立と新中国認識—『中国旅日記』との比較および、初出削除問題を中心として」、『関西大学東西学術研究所紀要』第44輯、関西大学東西学術研究所。
- 三橋正幸、2015、「盤上遊戯『クロキノール（闘球盤）』の伝来と普及の一端」、『日本レジャー・レクリエーション研究』第77号、日本レジャー・レクリエーション学会（第45回学会大会）。
- 吉野臥城、1909、『闘球盤』、『新体詩研究』所収、昭文堂。
- 日本経済新聞 YouTube、2017、「彦根に伝わる謎のゲーム『カルム』って何？」(<https://www.youtube.com/watch?v=i2Pr8317NZ0> 2022年3月25日検索)

↘ している（増田、2011）。また、手書きであった「中国旅日記」を翻刻すらしている（増田、2010）。ただし、増田氏の翻刻で4月24日の項目を見ても、この闘球盤についての言及はない。小説化する際につけ加えられた挿話だといえよう。

Crokinole and Carrom—A Supplement to “The Last King of Korea: Eun Lee in Taisho Era”

Kenji LEE

ABSTRACT

Eun Lee married Masako NASHIMOTONOMIYA in the Taisho era. Their grand wedding was planned in 1919, but then, Kojong, the former king of Korea, suddenly died, so it was postponed for a year. Based on NASHIMOTONOMIYA's diary, I wrote some episodes on their experience during 1919 in “The last king of Korea: Eun Lee in Taisho era.”

When we read her diary, many times we see Lee and NASHIMOTONOMIYA play a board game called toukyuban. At first, I thought this game was carrom, a generally known board game in Hikone, but I was wrong. Toukyuban is another game: crokinole. Therefore, I want to write on the differences between crokinole and carrom and their histories in Japan.

Key Words: Crokinole, Carrom, Masako LEE